私の生きる場所

山田中学校三年　森　安希子

「教室は嫌い。だって、居場所がない。友達がいない。誰も救ってくれない。だから、嫌い」。

私の心はいつも、こんなことでいっぱいだった。毎日、毎日、学校に行くことが嫌になって、教室にいることが嫌になって、誰のせいでもないのに関係のない人のせいにして、そんな自分が嫌になって、とにかく、今、自分が生きている場所が嫌になった。

でも、前はそんな風に思っていなかった。むしろ学校が大好きだった。朝、教室に入ると、「おはよう」と、声をかけてくれる友達がいたし、昨日のテレビの話しをまっさきに聞いてくれる友達もいた。男友達もいた。仲の良いグループだっていた。みんないたのにいてくれたのに、全部……なくしてしまった。

小さなことから始まった出来事。それが今、私を苦しめることになるなんて、思ってもみ

コクヨ　ケ−10　20×20

なかった。

去年の六月、私も入っていたグループでいさかいがおきた。リーダー格だった人をみんなで無視するようになっていった。その人のリーダー的態度に頼っていたのに、反面反発も感じるようになったからだった。だんだんエスカレートしていく聞こえるような悪口。変なあだ名。一ヵ月、二ヵ月と日が経つにつれ、その人は自分を否定する言葉を口にするようなっていった。私は急に焦りと不安に襲われた。そして一気に現実へと戻された。人を大切にしなくてはいけないと、誰よりも分かっていた私。その私が何ということをしていたのだろうか。自分が情けなくて、情けなくて、涙が止まらなかった。

次の日から私は、人が変わったかのように、とにかくその人とだけ話をした。今までの自分の行動を償うために。またもう一度仲良くしてもらうために。私は必死だった。周りの様子など眼中になかった。そうしたことで、

コクヨ　ケ-10　20×20

その人とは前のように仲良くなれた。しかし、なんということだろう。前のグループの人達とは一言も話せなくなっていた。それでも私は幸せだった。その人と話せるだけで良かった。

しかし、ある時から状況が変わってきた。その人が、元のグループの人達と話をしていたのだ。

―そうか。仲直りしたんだ。良かった。―

私は、本当に心から嬉しく思った。

―

でも、ふと気づいた時、私には居場所がなくなっていた。特にいじめを受けた訳ではないが、そのグループに私の居場所がないように感じたのだ。互いの関係がギクシャクし出し、私は自分から、そのグループと遠ざかった。

それからの毎日は、私にとって苦痛だった。学校に行けば、その仲間の楽しそうな姿を見なければいけなかった。

〈私だって……本当はあのグループにいたの

コクヨ　ケ-10　20×20

に。

何ともいえない気持ちでいっぱいだった。自分でも、よく分からない悩みがどんどん積もっていった。母に心配はかけたくはなかった。父を亡くした私達家族。母は看護士として休む間もなく働いていたからだ。でも、誰かに話を聞いてもらいたかった。

ある日、私は思い切って母にすべてを話した。今の自分が、こういう状況にあること。そうなった経緯。そして、これからどうすればいいのか。たまっていたものをすべて吐き出した。

母は黙って聞いてくれた。私がすべてを話し終えると、母はいろんなことを話してくれた。自分の職場でのこと。人間関係の重要さ。難しさ。私にとって、どれも大切なことばかりだった。すぐに解決できる答えは出なかったけれど、私を理解してくれる人がいることを再確認できたようで心は安心感でいっぱいになった。

コクヨ ケ-10 20×20

私には、生きる場所がないと思っていた。友達がいない教室。誰も救ってくれないと思い込んでいた学校。母を心配させたくないという、もう一人の自分。すべてが私を押しつぶしていた。そのせいで気がつかなかったことがあった。実は、自分が救いの手を伸ばしていなかっただけだったのだ。手をのばせばずっと近くにあった私の生きる場所。そこで待っていてくれた母の心。母の心は思えばずっと生きる場所だった。

今の私は、やっぱり一人で教室にいる。でも、少しずついろんな人と話をするようになっている。ただ、どうしても元の仲間とは話せない。時々、ひどく心が痛くなることがあるが、もう、前のように悩むことはなくなった。なぜなら、私の生きる場所がいつでも待っていてくれるから。

これからは、弱い自分自身との闘いだ。いつまでも一人でいてはいけないし一歩を踏み出さなければ何も変えることは出来ないのだ。

コクヨ ケ-10 20×20